
貴方の隣

夕月綾乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方の隣

【Nコード】

N2168B

【作者名】

夕月綾乃

【あらすじ】

『一生責任を感じるの??』幼なじみの凌じょうと亜美あみ。幼い時の怪我を今だに心配する凌。それに心を痛める亜美。二人の恋愛物語。

第一話 幼なじみ。（前書き）

初めて読んで頂いた方ありがとうございます。二人の気持ちを交互に書いて行こうと思ってます。文章力が足りない面が多々あると思いますが…宜しく願いします！！

第一話 幼なじみ。

『あみ——っ！！起きなさいよ。』

目覚ましがわりのけたたましい声が下から聞こえる。

『うつさいなあ〜！起きるよ！！！！』

ちよつとイライラ気味に母親に怒鳴った。

って言うか…起きない私が悪いんだけどね！

『凌ちゃん！来てるのよお——！！！』

もう…。来るの早過ぎ。

そりゃあ…早起きは三文の得とは言っけど！

『分かったわよ！！！』

『分かってないだろ？』

その彼は部屋のドアを開け微笑みながら呟く。

ボンッ！！

『勝手に入るな！！！！』

枕を投げた。まあ…簡単に避けられたけど…。

本当にあいつは…。

小さい頃はカナリ可愛かったのに！私達は家も近所の幼なじみ。

やつの名前は守田凌大学3年の21歳。もりた りょう

私は岩田亜美社会人1年生の23歳。いわた あみ朝のバトルは毎日の事！！

『早く出てって！！』

どんどんイライラが増す。

『着替え手伝おゝか？』

はあ？？イライラ最高潮！！！！

『出ていけ——！！！！』

『ねえ！朝来るの止めたら？？』

準備も終わり、朝食のクロワッサンを頼張る。

『こぼしてる…。』

人の食べ方にもケチつけるか？？！！

冷静に語るから余計にムカつくんだよ！！

『おばさん！味噌汁うまいよ。』

まあゝた！コビうつちゃって。

『本当??おばさん嬉しいわあ。そう言えば雑誌見たわよ!』

ん??雑誌??

『恥ずかしいっすよ!』

凌は少し照れてる。

『後で写メ撮らせてね??』

バカ母…。

『何なの??雑誌って!!』

私は凌の車に乗り込み質問。

『ああ…大学の先輩に頼まれたから。』

へ?

モデルしたの??

確かに認めたくは無いけど可愛カッコいい系??

昔から奴のファンクラブに呼び出しを受けたもんだ。フンッ!

『凌のくせに…』

凌が怒らない事を良い事に言いたい放題!

『まあ…1回切りらしいからな。』

そう言つて煙草に火をつけた。

凌は絶対、私に逆らわない。

幼い時、自転車の2人乗りをし事故に遭い私の足は一生引きずる形で歩く事に…。

凌に責任なんて無い…

でも彼は責任を感じてる。

『凌…。もう朝の迎えは要らないよ。』

この会話も昔からやってるけど…

『それは俺が決める！亜美が迷惑なら言えよ。』

その答えも昔から聞いているし…

『迷惑なのか??』

いつもと違う展開に驚く。いつもは聞いた事無いくせに…

『別に…』

私は素っ気ない言葉を返す。

『じゃあいいだろ…』

笑顔が眩しい！！その笑顔で雑誌に載ったんだろうなあ…

『彼氏が出来たら止めてね！！』

フンツ！！一言、釘をさし外の方を向いた。

『亜美は彼氏欲しいのか…』

ヤバッ…この手の話は禁句だった。また凌が気にする！！

『その足だとデートとか無理でしょ！？』

当時好きだった人に言われた言葉…。

それを聞いた凌は彼に殴りかかった事がある。

あの時ぐらいだと思う…。凌が怒ったのは…。だから、あれ以来、私は凌に（恋愛系）の話をしないようにしてる。

『例えばよ！！そう言う凌は彼女要らないの？？』

『要らない。』

はやっ！！即答ですか…。

『でも！！大学でコンパとかあるでしょ？？』

凌ぐらい顔良ければ！女の子ほつとかないよね。

『あるよ！って言うか？？さっきから亜美、俺に彼女作って欲しいの？？』

運転中の為、チラッと私を見る。

『そう言う意味じゃ…』

『ほらっ会社着いたよ。』

私は言おうと思った言葉を飲み込んだ。

（凌は一生責任を感じて生きて行くの？…？）

そう心の中で呟いた。

第2話 凌SIDE。

『はあ…。』

俺は深いため息をついた。

『おっ！？どおしたのかな？？ため息ついちゃって！！』

悪友の智^{とも}が嫌な笑いをしながら近付いてくる。

『別に…』

『それ最近のお前の口癖だな！』

『そうか？！』

智は『そつだよ。』って顔してやがる。

『何だよ！悩みがあるなら言えよ。』

お前に言つとおかしくなる！！絶対言つか！！

『お前、今…心の中で毒づいただろっ？！』

バレた？

『顔に出過ぎ！！…！』

『まあ～！いつでも聞いてやるからさあ！…まずは、仕事しろ。』

げっ！いつの間に、こんなにオーダー入ってんだよ！！
バイト中なのに仕事放棄してる自分が居た。

この店は智の兄貴のBARで俺と智は酒を作ってる。

ちょっと大人な感じのBARでJ a z zが良い感じで流れてる。
来る客も幅広い。

『なあゝに怒られてんの？？』

『あれ？優子さん！久しぶりっすね！』

カウンター越しに話かけられ挨拶する。

彼女は常連さん。聞いた話だと、女実業家らしい。

亜美とは大違い…

『忙しかったもんだから…疲れちゃった。』

ほろ酔い気味の彼女は色っぽく髪をかきあげた。

『そうですか。』

俺もグラスを拭きながら頷く。

ウェイターの鉄則。お客の会話は適度に…。

『凌くんが癒してくれると嬉しいんだけど？？』

ハハハッ…苦笑い。

『んもう～凌くん本気にしてないでしょ。』

してないです…。

『顔に出てるよ。』

やっぱり??

『凌くん彼女居ないんでしょう?』

『はい…。』

『年上嫌い?』

俺って明らかに誘われてる?

『好きですよ。』

『ふ～ん。それは本当みたいね!顔に出たし…好きな子が年上とか?』

優子さんは笑みを浮かべた。

えっ?また顔に出た?

『凌くん…顔が赤いわよ。』

マジっすか…。

『で？どんな子なの？』

『どんな？って言われても…。』

困った。客に言うのはね…。

『フフツ…秘密なのね？』

『すみません…。』

やっぱり言えないよなあ。

『じゃあ…言わなくて良いから。凌くん、私のお願い聞いてもらえないかな？』

お願い？？？？

『それで？？』

今は智の質問責めにあってる。

店も終わり個人面談状態。智は前から優子さんを気に入ってたから、彼女の『お願い…』が気になるらしい。

『なんで…！！お前なんだよ。』

智は納得出来ないらしい。

『俺だつてしらねえよ…！！』

烏龍茶を流し込む。亜美の迎えがあるから、俺は店では烏龍茶。

『彼氏の振りだろ?!』

彼女に頼まれたのは…

『親がね…彼氏も居ないなら、お見合いしろって言うの。私、まだ結婚はしたくないし。だから…お願い!!』

泣き付かれてしまった俺は『お願い』を聞く事に。

『智!本当に付き合う訳じゃないし!気にすんなよ。』

『まあゝな!所でお前、帰らないと間に合わないよ。』

えっ???

急いで時計を見る。

『やべえ!!もう7時かよ。俺、帰るよ。』

帰る俺の背中越しに『亜美ちゃんに宜しくなゝ!』手を振る智の姿があった。

第3話 独り立ち。

遅い…。

いつも早いくせに今日は連絡無しで迎えにこない。

『凌ちゃん。遅いわね??.』

母の心配そうな声。

そんな母に、

『子供じゃないんだから、そんなに心配する事無いんじゃない??.』

私の素っ気ない言葉に『この子は…』と母は私を睨む。

だって本当の事じゃん…

『もう、私、会社に行く!』

そう言って玄関に向かった。

『凌のバカ…』

確かに迎えに来なくなるのは良いけど…急にはムカつく!!

『行ってきます!..!』

見送る母に告げ、靴を履く私の後ろで…

『はいはい。凌ちゃん居なくて淋しくせに！フフッ』

母の嫌な笑いにまたムカ！！

『じゃあ〜ね！』

（バンッ！！）

玄関のドアをおもいつきり閉じた。

淋しい??

せいせいする！！

私は引きずる足を踏み鳴らしながら会社へと急いだ。

『亜美！明日、コンパあるけど行かない??』

同僚の金井砂耶かねいさやが声かけてきた。

『どうしよっかなあ〜。』

ちよっと考えたけど、

『う〜ん。やっぱり止めとく〜！』

またか…って砂耶の顔。

『いい加減、男を作りなさい!!』

心配されてるよね…私。

『気が向いたらね!』

『凌ちゃんでしょ??』

ん…? 何故そこに凌??

『亜美さあ…贅沢よ! あんな良い男を野放しにして。』

『の・野放し? 凌と私は関係無いから、当たり前でしょ?』

そうそう当たり前!!

『じゃあ? 凌ちゃんに彼女が出来たら?』

彼女…

その手の話は今まで殆ど触れた事無いから彼女ぐらいは居たとは思
うけど。

『別に…関係無いし。彼女が出来たら、万々歳だよ!!』

『亜美さん。ムキになりすぎ。』

砂耶の一言に頬を手で覆う。

ムキになる？

なつてないし…

『顔まで赤くして！可愛い！！』

茶化す砂耶を軽く睨んで

『分かりました！！行きます。』

結局、行く事にしてしまった。

（今日は本当にゴメン！）

凌からのメール。

（明日も来なくて良いから）

簡単な返信をする。

すぐメール音

（いや！明日は絶対に行くから！）

はやつ！早過ぎ…

（もう眠る。）

一言メールして電源を落とした。

キャー！ーッ！ー！！

しまった！！眠ってた。

昨日はアレから…。

急いで準備をする。

きつと凌が迎えに来るからその前に家を出る！！

『あらっ？早いわね？凌ちゃん来るんでしょ！！』

と言う母の声を無視し、家を出た。

良いタイミングなのよ！凌と私の関係を断ち切るには…。そして凌の責任を軽くする為にも…。

ずっと思ってたけど…今まで行動出来なかった事。

お互いの為に…

そう言い聞かせ駅まで早足で歩いた。

第4話 凌SIDE・俺の気持ち。

ヤバイ…間に合わない!!

智との無駄?話のおかげで朝になってるし…

車を脇に停め、携帯に目をやった。携帯のディスプレイは無情にも真っ暗。

充電切れかよ!!

携帯は諦め、亜美の迎えを急いだ。

『おばちゃん!!亜美は?????』

着いた時には8時前。岩田家の玄関に乗り込む。

『凌ちゃん!おはよう。亜美は行っちゃったわよ。』

やっぱり…。。

『一人でも大丈夫よ!社会人なんだし。』

そうなんだけど…

でも!

『凌ちゃん。朝ごはん食べる?』

『あっ!ゴメン。いいや...ちょっと追い掛けて見るよ!...!』

急いで車に向かう。

『もう...駅には着いたと思うわよ!』

玄関ドアの隙間から、申し訳なさそうなおばさんの声がした。

駅に着いた時には、悲しいかな...電車は走り去った後。

仕方無い...今日は帰って眠るか...

亜美の怒った顔を想像しながら、自宅に向けて車を走らせた。

(ピピピ...)

ん...?!

携帯のアラーム音が鳴り響き携帯を手に取り、ディスプレイを確認。

『やっぱり、返信無しかあ...。』

はあ。分かってたけど...

亜美に謝りのメールを入れたけど、仕事中だし返信無し。

ため息をつき、ベッドから起き、熱めのシャワーを頭から浴びた。

『もう…来なくていい。』

亜美のこの台詞は痛いよな…。

亜美すぐこれだし。

それでも…離れたくない。俺は亜美が好きだ。

事故の後は責任しか感じて無かったけど…

亜美が告白してる所を目撃した事がある。

振られた理由が『足』の事。

怒った俺はあいつを殴ったけど、俺の中では紛れもなく『嫉妬』を初めて感じた時だった。

それ以来、俺なりに守り、気持ちを抑えてきた。

でも…抑えるのも限界かな。

最近の亜美は俺から離れたがってる。

今は責任を理由に近くに居るけど…。

亜美が最後の決断を降すのも遅く無い。最後の決断…

亜美に彼氏が出来る事。

『亜美ちゃん！可愛くなつたよなあ〜』

智が口にした言葉が頭を過ぎる。

社会人になって元々の可愛さが増した。

確かなあ…。

短かった髪も長くなり、緩めの巻髪にしてる。
目もクルクルしてて、年上なのに幼い顔。背も低い。
でも、性格はきつい…。

俺にとっては、全部が愛しい。

俺…離れられるんだろうか??

まあ…今、考えたってなあゝ。
智でも誘って飯食いに行くか!!

『お前さあ…大学は??』

智の痛い一言。

『今日は休んだ…。起きたら夕方だったし。』

それに、亜美にも逢って無いのに行く気もしねえ。

『おじさん、おばさん。泣くぞ!!今は何処に居るんだ??』

親は良いじゃん…

『確か…イギリスだよ。』

最近、連絡とって無いからなあ…

うちの両親は海外赴任中。俺も連れていかれそうだったのを何とか断った。

亜美の側に居たいから!!

『そつか!お前も大変だなあ。あつ!!明日じゃねえの??優子さんのお願い?』

げっ…。忘れてた。

『俺も行くかな…』

『くれば??』

『はあ!それは…ダメだろ??』

おっ??焦ってやんの。

『離れた所で見てたら?』

『それ良い案だよなあ!!俺も付いてくよ!!』

嬉しそうな智の顔!!

お前は単純で良いよ…

俺にとっては亜美からの連絡の方が気にかかる…

どうにかして亜美の機嫌を取らなくては…。

第5話 気付いた気持ち。

『終わったあゝ??』

『うゝん。後は来週に回すよ!』

私は書類をファイルに入れ、パソコンの電源を落とした。

コンパの日が今日。さっきから砂耶が私を急かしてた。

『それで?今日のコンパの相手はどんな人達なの?』

行く手前気になるし…。

『ああ!うちの姉貴の知り合いらしくて、外資系の商社マンらしいよ!!--!』

砂耶は化粧直しを念入りに始めた。

商社マンかあ…。かつこよさ気な雰囲気だよ!

でも…。

凌も負けて無い!!カッコいいし、精神面は大人だし!!!!

何で????

私…凌の事をこんなに考えてるんだろ??…

うん…凌の事は考え無いようにしなきゃ！！

この歳になっても。凌から独り立ちをして無いなんて…。

でも…良い機会！！いい加減、離れる準備しなきゃ。うんうん…

『亜美？首振ってどうしたの？？』

無意識に振ってた？私…

『いや！何も…』

とだけ言い私も化粧直しを始めた。

『今日は本当に可愛い子ばっかで嬉しいよ！！』

メンバーは3対3。人数的には少ないかな。砂耶と私と同じ会社の受付の安藤さん。私以外はみんな美人…。

相手の人達も《大人の男性》って感じ！！みんな優しそうだし…。でも…大人過ぎて気後れしちゃう。

『亜美ちゃんどうしたの？？』

ん…？？私ボーツとしてた？

隣に座ってる男の人が心配してくれる。彼は佐藤秀樹さん。カッコいいと言うより雰囲気が大人数な感じで優しい人！さっきも酔っ払った友人を介抱してた。

『ちょっと酔っ払ったみたいです。でも！大丈夫ですよ！！』

最近は男の人が凌しか近くに居なかったから、他の男性って緊張する。

『大丈夫なら良いけど…』

『気分悪かったら言ってね？！』まで付け加えてくれるなんて…優しい！！

（ブルブル…）

ん？？携帯？？

パカッ。（着信…凌ちゃん）

プツッ！切っちゃった。

今は出れないし…

（ブルブル…）

また？？

もう！！

『もしもし…』

とうとう片耳を押さえて出る。

『亜美？？』

一日ぶりの凌の声。

『今日は無事に行けたか？？』

心配すぎ…

『うん！行けたわよ。』

『あれ？周り騒がしく無いか…』

やっぱり気付いた？

『ああ！！飲み会だよ。』

『へえ〜。亜美が飲み会に出るって珍しいな！砂耶さんと一緒？』

ハハハッ…。コンパです！

なんて…なんとなく言えない。

『一緒よ…。あれ？凌も外なの？』

何か…クラシックが流れてるけど？

『俺は…智と食事中！』

ふん。

『きゃあ！！』

『亜美ちゃん！何処に電話してんのぉ？？』

うわ！酔っ払い！！しかも抱き着いてくるし！！！！

『亜美？どうした！！！！』

『な・何でも無い！！！！凌、切るね！じゃあ』

ブツッ…

んも…何なの！！この酔っ払い！！！！

『やめて下さい！！！！』

ヤダヤダダ！！！！胸元に手が…！！！！

『いい加減にしなよ！！！！』

砂耶が乱入！！

『お前やめろ！！！！』

佐藤さん乱入！！

それでも酔っ払いはエスカレートしてキスしようとしてくる。

『亜美！もう！！こいつ危ないから店を出な！！』

砂耶の一言にバッグを掴んで、砂耶に合図して店を出た。

気持ち悪い。胸を触られた感触残ってるし…最悪

うつ！！涙が…。

凌に、で…電話しよう。指が震えてうまく押せないよ…。

（プルルル…）

（プルルル…）

凌、出て…

（プルルル…）

『もしもし！！亜美？何かあったのか？！』

『うつ…』

凌の声聞いたら安心して涙が止まらない…

『亜美？落ち着いて！！』

『今どこだ？！！！！』

今…？えつと…

『○○街の…○○こっ…公園のベンチ。』

『すぐ行くから…！そこから動くな…！！分かった？』

うっ…。

頷くしか出来ないよ…！！

『亜美！大丈夫だから…』

不思議…凌の《大丈夫！》は本当に安心する。

電話は切れてるけど…

携帯を握りしめた。

やっぱり…私、凌に頼ってしまっただよね。

『亜美…！！』

凌の声だ…

街灯の横を走ってくる影。影がドンドン近くなる。

『りよう…！！！！』

凌の胸に飛び込んだ。凌の心臓がすごいスピードで音をたててる。

きつと…私の為に急いでくれたんだ。

そう考えると、安心して一気に涙が込み上げる。

『ああ——ん。』

頭を撫でる凌の手には優しさが滲み出て、守られてるのがよく分かった。

暖かい…

すごく落ち着く…

『凌の胸ってこんなに暖かかったんだあ…。』

背の高い凌を見上げ呟く。
本当に安心出来るから…

『ハハハッ…今頃、気付いた？』

泣き止んだ私を見つめ笑う。

今、すごく痛感した。

私には凌が1番なのかも。この笑顔を独り占めしたい…。

実は…心の中では昔から、そう思い、願ってたのかもしれない。

第6話 凌SIDE 壊したい関係。

『おいおい…ここで食事か???』

智が驚くのも分かるよ…

俺もびつくりだ!!!

超一流ホテルに到着し、中に入った途端に目に飛び込んできたシャ
ンデリア!!

『ああ…このロビーで待ち合わせ。』

今日は優子さんの《嘘》に付き合う予定。

『俺は離れた所で待つてるよ!!レストランは敷居が高い!』

そりゃ〜な…

俺も同じ立場なら、そうするよ。

『凌くん!!』

『こんばんは…』

大人だよなあ…。

黒のタイトなスーツに小振りのアクセサリ。
少し派手めな顔の彼女にはシックなスーツがよく似合ってる。

『今日はゴメンね…こんな事を頼んで。』

『良いですよ…。お友達を連れて店にいらっしやってくれれば。』

微笑んだ。

『分かってるわ。それにしても…凌くんって本当にいい男ね。スー
ツも似合ってる。』

ふう…。ネクタイが苦しい。

スーツってみんな良い男に見えるんだろっな？

『親御さんは？』

『もうすぐ着くと思うけど。』

彼女は時計を見た。

俺も時間があるなら…

『少し電話してきます。』

昨日から亜美と話てない。
声が聞きたい…

(トウルルル…)

二回目の呼び出し音。

プツ…

（プープープー…）

あれ？切られた？

切れたのか？

（トゥルルル…）

もう一度コール…

『もしもし…』

『亜美？？』

やっと…声が聞けた。

飲み会中らしい…

あいつ…飲めないのに。

『きゃあ！！』

ん？？亜美の声！！！！

『亜美！大丈夫か？』

おいおい…大丈夫かよ！！！！

『切るね!』

プツ…

ええ?!マジ!!

切れた携帯を見つめる俺。

大丈夫かよ…

『凌くん?親が着いたけど…ちょっと?顔色悪いわよ。』

心配だし…顔色も悪くなるよ。

『あ…大丈夫です。行きましょう。』

すごく気になってるけど、彼女と一緒にホテル内のレストランに向かった。

彼女の親御さんは金持ち(娘が実業家になれるくらいだし)。感じは良い人達で嘘を付くのが悪い気がする。

でも…心の中は

亜美は大丈夫か…?

そればかりが頭を回る。

『凌くん？』

腕を優子さんに引つ張られ、話を聞いて無い自分に気付いた。

『あつ…すみません…。』

俺ってバカ？！

亜美の事になると他に気が回らなくなる。

昔からなんだよな…。

ブルル…

携帯に気付く。

（着信…亜美）

マジかよ！！！

『すみません…ちょっと電話なんで！！』

不思議そうなみんなを余所に俺は席を立ち電話を急いでとった。

『もしもし！！亜美？何かあったのか？』

亜美の声が奮えてる！！

泣いてるのか？？

何とか場所を聞きだし、智の待つロビーへ…

『あれっ？終わったのか！！』

終わった？じゃないよ…。お前！！！呑気にコーヒー飲む場合じゃねえーよ！！

『智！！車の鍵をかせっ！！』

『はあ？！』

『はあ？じゃねえーって！！亜美に何かあったんだよ。』

俺の剣幕に押されて、鍵を差し出す智。

鍵をもらって、先を急ぐ。

ヤバッ！！俺…優子さんに何も言っただけ…！！
しょうがない…

後は、智任せたぞ！！！！

何処に居るんだよ…。

車を公園の駐車場に置き、さっきから捜してるけど見つからない。

携帯かけるかあ…

あれ??

街灯の下でベンチにうずくまる人影。

『亜美!!!!』

泣き顔のまま、走って来る。

そして、俺の腕の中にしっかり抱きしめた。

腕の中で泣きじゃくる彼女が愛しくて、抱きしめる腕が強くなる。

亜美…ずっと側に居て。

俺から…離れないで。

心の中で呟き、願うしかない。

俺が暖かい?

違うよ…亜美。心の中は欲に満ちてる。

亜美の安心してる顔…。

壊したくなる!!

俺の物にしたいよ…亜美。

第7話 初ラブホ!!!

んん…っ眠った。

私あれから…？

『えええええ!!!!!!!!』

横には裸の凌!!!

バサッ。

布団をめくり、自分の身体を確認。

『はあ…。服着てた』

一安心…。いくら好きだけど相手の気持ちを知らないのにね??

『ぬがした方が良かった?』

慌てる私を見ながら、微笑む。

『もう!!!バカ…』

いつものテンションには戻れない…。

私…顔、赤いよね?

恥ずかしい。今まで凌と二人で泊まりなんて一度も無いから、きつ

い言葉言えやしない。

『凌…服着てよ!!!』

ドコ見たら良いか分からないじゃない?!

『ああ…。そつか!!!』

Yシャツを着る凌が眩しい。

『凌…身体きれい』

『えっ?』

わっ…。私なんて言った?!

凌の顔、かなりビクリしてるよ!!!

『クスッ…。ありがと。じゃあ!!!亜美も見せて?』

『や…やだよ!!!』

またまた…顔赤いよね?

昨日から、私可笑しいよ…。

って言うか?ここドコ?!

この部屋って!!!俗に言う…

『ラララッ!!!ラブホ???』

だって！！部屋ピンクだし…。ベットもメチャ広いし…。私と凌の部屋でも無いし…。

『そうだよ…』

凌なんて冷静に言うし！！

『亜美？風呂入ったら？？』

また…冷静なのね！！

そりゃー！凌はモテるから冷静に対応出来ちゃうだろうけど…。

私…23歳なのに、初ラブホ。天然記念物もんだよね？！

本当に好きな人とじゃなきゃ行きたく無かったんだもん！！！！しよがない。

『亜美？聞いてる？』

そうでした…。お風呂ですね。入りますよ！！

『分かりましたあー。入ります！！覗かないでね！！』

フンッ！！！！

そう言って、お風呂に向かった。

『上がったよ…。凌も入ったら？』

大きくて、ジャグジー付きのお風呂に興奮して、つつい長風呂しちゃった。

『ああ…分かった。』

口数少なく、凌はお風呂に向かった。

変なの???口数減っちゃって。

でも…ここに来て何もされない私って？

色気ゼロ??

女に見られて無い??

何か…安心と言つか、残念と言つか…。

少し複雑。

昨日、自分の気持ちに気付いたけど…凌的に私はただの《償うべき女》なのかな??

可愛い女だったら、凌も好きになってくれるの??

分からない…。

本当に分からない…。

『さつきから…何を百面相してんの？』

濡れた髪をタオルで拭きながら歩いてくる凌は最高に色っぽい…。

勝てない。私には色気は無いもん。悲しい…

『百面相なんてしてないよ！！うるさいなあ…。』

また可愛いげの無い事を…。

『ふん。そう言えば…亜美、昨日何があったの？』

ベットに座ってる私の横に腰かける。

そうだった…。言わないとダメよね？

『昨日は…』

私は凌に昨日の事を話した。一応…全部。隠せないと思ったから。

黙り込む凌。

その横で下を向く私。

バカ正直に好きな人に話す私って…救いようが無いよね。言った後に気付いた。

『他には大丈夫？何も無かった？』

心配そうな声。

でも…私の目を見ない。

『うん…』

悲しい…。

軽蔑してるの？

でも！！コンパなんて、みんな行ってるし。
軽蔑される事なんてしてない！！

『凌！！こっち向いてよ。』

私は凌の顔を私の方へ向けた。

ビックリ顔の凌。

『心配させてゴメンなさい…。』

私は謝りながら、涙が出てきそうになる。
手を離し反対を向いた。

涙をもう見られたくないし…。

『亜美？亜美もこっち向いて？』

グイッ

肩を寄せられ、抱きしめられた。

『もう…。心配させないで?』

頭の上で声がする。

そっと顔を上げるといつもの微笑み…だけど?

どんどん、顔が近付き…

チュツ…

優しく私の唇にキスを落とした!!

キ・・・キス?!

凌の顔が見れない…

下を向く私に…

今度は長めの優しいキスをした。

角度を変えて…何度も。

神様…教えて下さい。

彼は何故キスしたの!!!

第8話 凌SIDE 初キス!!!

泣き疲れたのか?ぐっすり眠る彼女。

車に乗せたけど、眠そうな彼女をラブホに連れ込んだ。

いやいや!!襲うつもりは無い!と思う。

彼女は家まで眠気に勝てない感じだったし!!!

まあ…俺も理性の事なんて考えて無かったんだけど…。

『もつかなあ…。俺。』

マジで亜美は可愛い…。

俺の物になってくれたら良いのに…

理性を保つ為に、煙草に火を点けた。

『ふう…。』

寝返りをうつ彼女。

柔らかい髪に触れる。気持ち良いなあ…

頬にも触れる。柔らかい…

何やってんだ！俺…

眠ってるのに最低だろ？

でも…好きな女が眠ってるのに、理性を保つのがきつい！！！！

ちょっと調子に乗っちゃいます…。

頬に軽くキスした。

ヤバイ…。これで止めておこう。

亜美…ゴメンな。

俺も男です…

眠ろう！！眠ってしまえば考えずに済む。

眠れるか？いや…無理にでも。

ガサッ。ん…？

目が徐々に覚めて状況把握。眠れたんだ…。

隣で慌てる彼女。

そりゃ…ビックリだよな！

起きたら上半身裸の俺。

そつと目を開けて彼女の行動CHECK!!

おいおい…まずは服CHECKかよ!

『はあ…服着てた。』

俺は鬼じゃないんだから…。

了承されないのに、ぬがさいって!!

でも…意地悪でも言ってやるか?可愛いから…

『ぬがした方が良かった?』

亜美ちゃん!顔真っ赤。朝からその顔は可愛い過ぎて…正直、男にはきついです。

何とか…風呂には入らせただけ。

冷静に対応出来たか?

こんなに緊張した事無いよ…。

俺は初めてじゃないんだけど、やっぱり本気の子には緊張する。

前は亜美を忘れる為に、誘われるままに女の子と寝てた。最低野郎だったんだよなあ…。

亜美はこんな事知らないけどね。

あっ！！！！ここ一年は彼女一筋です！！！！

やっぱり好きな子と結ばれたい…。

最近の行動に智もビックリして、

『お前…大人になったなあ！！』

って褒められた。

だって…今頃になってバカな俺に気付いたんだ。
これからは亜美の事大切にしたいって…。

大人になったんだろうな…。
呟き…ベットに寝込んだ。

風呂から上がって来た彼女は、頬をほんのり染めて色っぽい。
ヤバっ！！俺って大人になってないじゃん！！！！

風呂に避難！！！！
興奮し襲ってしまいそうな自分がいて…

冷静になれ…俺。

頑張れ…俺。

呪文のように唱え、熱めのシャワーを頭から打ちつけた。

『はあ…。』

冷静を取り戻し風呂を出る。

ガウンを羽織りベットに越し掛けてる彼女。百面相してる。

その光景が面白い!!!

それをからかうとムキになって怒るし。

まあ…そこが可愛いんだけどね。

でも…聞いて無い事が。

昨日の事。すげえゝ気になってる。

話を振る俺。そして、大人しく話す亜美。黙って聞いてたけど…。

コンパに酔っ払い??

あげくに…胸触られた?!

ムカムカする!!!マジかよ!!!

その酔っ払いの男!!

でも…無事で良かった。

俺を呼んでくれた事も…。

『他には大丈夫?何も無かった?』

それしか言えない。顔も見れないなんて…心が狭い？

今、顔を見られたら…嫉妬した俺の顔を見られてしまうし。そんな醜い顔は見せたく無い…。

二人で下を向いてる…。

これ以上、何て言えば良いんだろう。言葉が見つからない。

『凌！！こつち向いてよ。』

ええ？！

何で怒るんだ！！

あげくに顔を向けさせられるし？？

ビックリだよ！！！！

『心配させてゴメンなさい…。』

真っ赤な顔で謝り、反対を向いた。

どうしたんだ？！

謝った事なんて今まで無いのに…。

素直な彼女が可愛いくて彼女を呼び掛け、こつちを向かせた。

真っ赤な顔で涙ぐむ彼女の肩を抱き寄せた。

『もう…心配させないで?』

彼女を抱きしめ、優しく呟く。

改めて思う。もう離したくない。ずっと、このまま居たい…。

顔を上げる彼女に優しく微笑む。

彼女の顔に理性は飛んだ…。

そして…キスした。

ビックリする顔…

拒まない彼女に、俺は止まらない…。

もう一度、彼女にキスをする。少し長めに…。

柔らかい唇。何年も待ち侘びたこの時を…ゆっくり噛み締めた。

きつと…この時の俺には涙が滲んでただろう。

第9話 すれ違う思い。

頭が真っ白…。

私達…キスした。

帰りの車でも、何も話せず無言。

でも…このまま理由も聞かずに帰るのはイヤだし。

そう考えてたら家の前…。

『凌。』 『亜美。』

二人の声が重なる。

『亜美から言って？』

凌の優しい声。

恥ずかしくて下を向く私。

『あの…ね』

(……………)

もう…こんな時に携帯の着信。

『出たら？』

優しい声に促され電話に出た。

『もしもし？亜美ちゃん！』

あれっ？

『智くん??』

二人で顔を見合わせる。

《俺は居ない事に!!》

身振り、手振りで伝える凌。

そりゃあね…この状況、説明しにくいよ。

『昨日さあ…凌のやつ！ホテルから亜美ちゃん搜索？で飛び出してさあ…連絡取れ無いんだよ!!』

何？ホテル？

黙ってる私に追い打ちを掛ける言葉…

『凌、彼女の両親にあってただけど…！それが…』
どう言う事？

気分が悪い…。

血の気が引くってこう言う事言っただよね…。

私は冷静を装い電話に答える。

『智くん…凌は迎えに来て帰ったから…。ゴメン、切るね!』

『えっ??亜美ちゃん!!』

智くんの声は聞こえたけど…。
それだけ言って電話を切った。

彼女?

両親?

何?

さっきまでの事は夢なの?
幸せだった気分が音を起てて崩れる。

『亜美?智なんだって?』

普通の顔で話かける凌に気持ち悪くなった。

平気な顔で…話かけないで!!

私に近寄らないで!!

『凌…気分悪いから、帰るわ。ありがと。じゃあね!…』

『あつ亜美?』

凌の声を無視し車を降りた。

あのキスは何だったの？

そう心で唱えながら…。

『亜美？大丈夫？』

砂耶は心配そうにコーヒーを容れてくれた。

私はあの日以来、凌と話てない…。と言うより会っても居ない。
電話やメールは着信拒否。

そんなに強く無い私には、今ある電話やメールは本当にきつい…。

あの日は泣いた…。涙が枯れるんじゃないかと思うくらい…。

自分の気持ちに気付いた途端に現実を突き付けられ…。

今まで凌と言つぬるま湯に浸かってた自分にも嫌気がさした。

『一ヶ月だよ？そろそろ…家に帰らないと？』

そうだよね…。

あの日、家に帰り荷物を持ち飛び出し、一人暮らしの砂耶の家に転がり込んでる。

『ゴメン…迷惑かけて。』

『私は良いけど…。凌ちゃんとも話さないかね？』

逃げてばかりじゃいけないのは分かる…。

でも…凌の本心を聞くのが怖い。

『まあ…亜美が話したい時でも良いか！』

優しい手で私の背中を軽く叩いてくれた。

『あんたって子は…！』

母親の小言…。

連絡を入れてたとは言え、一ヶ月も家出状態には心の広い母親もさすがにね！

『すみません…。』

謝りますよ…。

『お父さんが居ないから良かったけど…』

うちの父親は単身赴任中。

はい…。おかげで助かりました。

あの父親にバレたら…。

怖いよ！！

我が家に女の子は私だけだから…可愛いみたい。

兄貴は県外だし…。

『あつ！凌ちゃん…昨日挨拶に来たわよ』

凌が挨拶？

『挨拶？』

『ああ…あんたも知ってるでしょ？』

ん？知ってる？

『何が？』

母親の驚いた顔！！

『凌ちゃん。先週引越したのよ』

『…。』

引越し？

『まさか？知らなかったの』

知らない！！！！

家を飛びだし、三軒隣の凌の家。

ピンポン！

ピンポン！！

何度も鳴らすけど…

無言のインターホン。

『凌…』

私がいけないんだ…。

何も聞かず、無視して。

罰が当たったんだ…。

本当に何もかも無くしてしまった。

私は答える事の無いインターホン越しに、泣き崩れるしか無かった。

第10話 凌SIDE 俺の独り立ち。

何を話せば良いかなあ…。

やっぱり！！ここはドンつと男らしく…告るか！！

それにしても…よく我慢したよ。キスだけで…

だってさあ…気持ちも伝えて無いのに、抱くのもね？

今までだって我慢したんだから少しくらいゆっくりでも悪くないだろう？

キスした感じから言って…亜美も俺と同じ気持ちだと思う！！

《両思い！！！！》

本当に好きな子と気持ちが同じって…

《最高に幸せ！！！！》

車の窓から叫びたいくらいだよ！！！！！

亜美も黙ってる。

でも…イヤな沈黙じゃないから。

きっと亜美も次の言葉を考えてるんだろっ。

考えてるうちに…岩田家に到着！！！！

車を横付けし、亜美の顔を見る。

よし！！！！言うぞ。

本当に長かった…

『亜美！』 『凌！』

言葉が重なる。

『亜美から言つて？』

優しい声で彼女を優先。

その間にカッコ良い言葉を考える。

『あの…ね？』

ヤバイ…この雰囲気。先に言われるのか？！
優先するんじゃないかった…。

まあ…亜美に頑張ってもらうか？

(…♪♪♪♪♪)

はあ？こんな時に携帯かよ！！

焦るな凌…。少し待てば幸せが俺の物！！！！

『出たら？』

よし！！（家宝は寝て待て！）って言うし…

『智くん？』

何！！！智？

朝に二人一緒はまだヤバイ！！！！告っても無いし…

後から話したい…。

彼女に伝えた。

おっ？分かってもらえたみたい…。

黙ってる亜美？

智が話してるみたいだけど俺には聞こえ無い。

あいつ何話してんだ？

亜美の表情が変わってる？？

あれ…？

『切るね…。』

亜美は電話を切ったけど…顔が強張ってる。

『気分悪いから』

そう言って早々に車を降りた。

俺の呼びかけにも答えず…

あんなに良い雰囲気だったのに？

家に着いた俺はソファーに座った。

落ち着こう…

どう考えても亜美の態度は変わった。

智の電話の後、急に…

智…。何か話したのか？

すごい気になる…。

絶対に良い雰囲気だったはずなのに。

智に聞くか…

携帯を取り出す。昨日、亜美を迎えに行ってから携帯は切ったままだった。

連絡とれなくて亜美に電話したんだろう。

『もしもし…智？』

『おう！お前何してたんだよ！！』

智の声に謝るしかない…。

昨日は何とか乗り切ってくれたらしい。

ありがとう智！！！

でも…

『あつ！さっき亜美ちゃんと話したよ。連絡とれなかったから…』

そう！俺は1番その話が聞きたい。

『そっか。で？何話した？』

俺はその時まで簡単に考えてたんだ。

『話？昨日の事だよ。優子さんの両親と食事したってやつ。』

それだ！！！！

『お前！それ、頼まれたって事言ったか？！』

『いや…始めは冗談のつもりだったからさあ……本当の事言おうとしたら切られたんだよ。』

マジかよ…

絶対にそれだ…。

だから電話の後、おかしくなったんだ…。

『お前達、何やってんの？』

暢気に言うな！

『また後でかけるよ！！』

『おい…』

ブチッ…

智…俺の幸せを壊したな。

（あなたのおかげに…）

亜美への電話は繋がらない。

会いに行こう！！

誤解を解かないと…

『おばさん！！亜美は！？』

玄関を開けるなり叫んだ。驚いた顔で出て来るおばさん。

『亜美なら泊まりに行くって出たわよ。朝帰って来たのに…。』

さっき帰ったのに？！

まあ…明日も休みだろうけど。

何処に行ったのか、おばさんも知らないみたいだし…。

天国から地獄に落とされた。

俺、どうしたら良いんだ？！

さっきまで腕の中に居た亜美の温もりは消えようとしていた。

『一ヶ月かよ…』

今日もバイト中…。

智にはあの後話した。

あれから智は謝ってばかり…。

智のせいでは無いよ。話しをしてなかった俺が悪い。

『亜美ちゃん連絡まだ取れない？』

あの日以来、着信拒否。家にも帰ってこない…

会社まで行っただけど、中には入れなかった。

『ああ…』

静かに答えた。

『俺も電話したけど…』

出てくれなかったらしい。

『本当にゴメンな……。』

謝る智に肩を叩く。もう良いよ……。って意味。

『仕事するぞ！智オーダーは？』

『ああ……。』

そう言ってお客さんの所へ。

見届けて溜息をついた。

『大きい溜息ね？』

ん…？

『優子さん……。』

あの後、謝って全部話はした。

『まだ彼女連絡取れないの？』

心配そうな彼女。

すみません…まだです。

『時間が解決してくれたら良いわね……。』

優子さんは静かに微笑んだ。

俺自身もそう願いたい。

『凌くん…。今日はビジネスの話に来たの!』

ビジネス?

『うちが来月出すアクセサリーの男性モデルをしてもらえないかしら?』

軽い感じで…。

とも付け加えた。

『少しは気が紛れると思うけど?』

そっだな…。

今の俺の姿は…亜美に見せられない。

精神的にも弱ってて情けない顔。

亜美が居ない事がこんなに苦しいとは思わなかった。

毎日苦しくて…

苦しくて…

苦しくて…

『大人になりなさい…。』

優子さんの言葉は胸に響きそして決めた。

『宜しく願います…。』

精神的に強くなって、亜美にもう一度話しに行く。

そう心に決めた。

『引越しまでするのか？』

智の疑問の声。

『ああ…。』

段ボールを空け中身を出す。

『店の2階借りて悪いな…。』

謝る俺。俺は店の2階を借りて住む事にした。

自分の家は親のもんだし、そのまま。

俺だけの引越し。

『いつまで使って良いけどさあ…。』

智の言いたい事は分かる。

自宅に居れば亜美に会えるかも知れない。

だけど…俺も少し離れないと強くなれない。
それに待つより行動を興せるようにカッコいい俺で居たい…。

第11話 偶然の再会。

凌が居なくなつて早二ヶ月。周りはクリスマスモード一色。

2ヶ月かあ…。

イルミネーションとカップルを横目に呟く。

ふと意識が遠退くと思ひ出すのは二回のキスと凌の胸の温もり…。

凌を捜そうと思えば出来る。

でも…私は何もしてない。

あの時の彼女とどうなつてるか？

その話題を笑つて話せる自信が無いから…。

最近涙も枯れて、時間を生かせなかつた後悔だけが胸を過ぎり、
痛みに胸を押さえる日々。

凌…今何してる？

元気？

彼女とは？

胸の中でいつも質問。

でも…私ってバカだよな？

凌にそんな人居たのに気付かないなんて…。

『亜美！お待たせ…』

小走りで駆け寄る砂耶。

『大丈夫。今、着いた所。』

今日は砂耶のお願い？で男の人と逢う事になってる。
まだ、気分的には厳しいんだけど…

砂耶の《前向き》に行かないと！！

って言葉に促されちゃった。最近の私を心配してくれたんだろうけど…。

『どんな人なの？』

私を知ってる人…って聞いたけど？

『ああ～一度会ってるよ…』

ふん…。

『あつ！！居た。あの人よ！！！！』

佐藤さん??

一度だけ行ったコンパに居た人。

『そうよ！！亜美の事気にいってたの！！』

砂耶さん…そんなに力説しないで

『ほら！！さつさと行く！！後は自分で頑張って♪♪』

ポンッ。

押さないでよ…薄情者！

砂耶を睨み、一人彼の方へ歩く。

『こんばんは…』

緊張…

『こんばんは！！今日はゴメンね。』

本当に良い人だなあ…。前もそう思ったけど…。

『いえ！前回は助けてもらって…ありがとうございました。』

『大丈夫だったの？』

あの時…凌が助けてくれたっけ。

『亜美ちゃん？』

『あつ…すみません。ぼーっとしちゃって。』

また凌の事考えちゃった。ダメね…私。これで前向きになれるのかなあ…。

『腹減ったし、食事でもする?』

佐藤さんの問い掛けに元気よく頷いた。

食事は美味しいイタリアン。

少しだけワインを飲んじやって、ほろ酔い気分♪♪♪

そして二人で恋愛についての話題。

『毎日逢うと飽き無い?少し時間開ける方が新鮮な気持ちになれるじゃない。』

佐藤さんとの恋愛感の違いに驚く。

私は凌とほぼ毎日会ってたけど…飽きた事ない。まあ…ム力つく事はあつたけど…。

佐藤さんの考え方って大人の考えなのかなあ…?

『まあ…この話は終わりにして…この後、時間ある?いい店あるんだ!』

明日休みだし…行っちゃいますか!!

佐藤さんに連れられ行きつけのBarに到着！！

暗めの店内でジャズとか流れてる。

『良い雰囲気ですね！』

こんな所には縁無かったから、すごい新鮮！！！！

『最近、よく来るんだ。』

二人でカウンターに座る。

へえ…。やっぱり大人だなあ。

一人感心。

『あれ？今日は作る人、違うんだね。』

佐藤さんはカウンターでお酒を作ってる人に話かけてる。

『ああ…少し遅れてるみたいですね。』

バーテンさんは静かに答えた。

『亜美ちゃん。いつもの子カッコ良いんだよ！！』

微笑んで一口お酒を含んだ。

『そうなんですか…。』

カッコ良いのは…

もう嫌！

平凡が一番。

でも…考え込む自分が一番嫌！！

『亜美ちゃん？次は何飲む？』

また…私、別世界に行つてみたい。

でも？お酒ってこんなに美味しかった？

日頃、飲まないけど！

何かいい気分♪♪

嫌な事とかも忘れられそう…。

『同じ物で…！』

ピンク色の甘目のカクテルが気にいった私。

『少しペース落とさないと、後にくるからね？』

もう…佐藤さんも心配性なんだから。

『大丈夫です♪♪』

と言っただけど…

あれ？

何か…目が？

霞んでる…？

下を向く私。

酔っちゃったのかな…。

『こんばんは…』

ん…？

『こんばんは。今日は今から？』

バーテンさん代わったみたい。

二人で話してる。

私は眠い…。

頭が起き上がら無いし。やっぱり帰った方が良いかな…

『佐藤さん…お連れの方、大丈夫ですか？』

バーテンさんの心配そうな声。私の事？

『大丈夫ですよ♪♪』

下を向いてた私は頭をゆっくり上げた。

『…あ…亜美！！！！』

目の前に凌が見えるんだけど…。

目を擦って見る。

凌が居るわけ無いじゃない！！

私って救いようの無いバカ？！

凌が見えるなんて…

酔っ払い？

これは…飲まないと！！私、幻覚が見えるなんて…

病気だわ…

『佐藤さん…お酒はまだですかあ？』

お酒を催促する。困惑顔の佐藤さんを横目に止まらない私。

『亜美ちゃん…少し酔い冷ました方が…』

もう…心配しすぎ。

『だい…じょ…』

『いい加減にしろよ…亜美!』

ビクッ!!!

この声…

やっぱり…

『りょ…う?』

『ちよつと来い…』

カウンターから出て来た凌は私を抱き抱えるように外に連れ出す。

何でここに居るの…。

本物?

思考回路…私可笑しくなってる?

私は店の外に連れ出された。

真っ直ぐ見つめる凌の目が恥ずかしくて見れない…。

『亜美…お前飲めないだろ?』

怒ってた声が心配そうな声に変化する。

その声は私の中で何かを弾け飛ばした。

『…じゃない』

今さら何よ…

『亜美?何?』

『凌には関係ないじゃない!!!』

そう言っ、抱き抱えられてた凌の胸を突き飛ばした。

本当はこんな事を言いたかったんじゃない…。

でも…お酒の力?口が止まってくれない…。

『私がどうなろうと…。今さら心配しないでよ!!!』

彼女居るくせに…

私の前から居なくなったくせに…

心の中も目もグルグル回る。

『ゴメン…』

やっぱり謝るんだ…。

『話しはそれだよ。じゃあ…佐藤さんが待ってるから』

凌に背を向けた。

フワッ…

『…！！！！』

『嫌だ…』

抱きしめ…られてる？！

『ゴメン…佐藤さんには悪いけど、もう限界。』

耳元で響く甘い声。

『げ…ん…かい？』

抱きしめられた腕の中で聞き返す。

『そっ…逢いたかった。』

逢いたかった？？

『そんな事言わないで！！彼女が居るじゃない。』

凌の顔を見上げ一番聞きたかった事を聞く。

『居ないよ…』

微笑ながら呟く。

『でもっ！ん…っ』

優しいキス…。

始めは啄む（ついで）ように…。そして深く…。巧みに私の口内を荒らされ、頭の中が真っ白になる。

通り過ぎる人達の視線を感じ…

『凌…みんなが見てる』

少し唇を外し伝える私。

『いいよ…見てもらおう。』

『でも…』

『亜美…黙って』

そしてまた深いキス…。

『凌…苦しいよ』

また唇を離し

ふう…。一息。

私慣れて無いんだから…。

『ダメ…』

そして、また私にキスの雨。

『うつ…ん』

言葉にならない私の声。

恥ずかしい／／／

チュッ

最後に軽くキス。

『亜美…マジ可愛い。』

強く抱きしめる。

『もっ…凌！ヤラしい…』

酔いも冷めるよ…！！

『今頃、気付いた？』

／／／。私は無言。

『顔、真っ赤!!』

覗き込まないで!!

『亜美…』

急に凌が真剣な顔になり

『なに…?』

私も真剣に答えた。

そして、凌は強く私を抱きしめ

『ずっと…好きだった。二度と離れたくない…。』

一言呟く。

そして…

『私も絶対に離れない…』

そう呟いて、彼の胸に顔を埋めた。

第12話 凌SIDE 偶然の再会。

『はあ…』

でかい溜息も出るよ…

亜美に会えなくなって2ヶ月。

強くなるう！と思っではいるけど…ダメな俺。

情けない？

だよなあ…。

大人になる為に離れたのに禁断症状でまくりだし。

『守田く〜ん！駅前のパネル見たわよ〜！』

久々に大学に出てみたら、甲高い声の女達。

はつきり言っただルい…

優子さんの頼みを聞いてアクセサリーのモデルをしてから声掛けられるのが多くなった。かなりだるい…。

『ああ…』

一言だけ返す。

『クールだよね♪♪そこも良いけど…』

代わる代わる話続ける。

クールじゃなくて…

ダルいんだよ!!

『そつだ!最近、送り迎えして無いの??.』

おいおい…。

何で知ってんだ?

ストーカーかよ。

って言うか…

お前らには関係無いし…

まじで!!

『…つぎっ』

『守田くん?何。』

聞こえて無いのか?!

だから!!

『凌ちくん、帰るぞい!』

智！！良い所に来たよっ。

『おお！！！』

女達の引き止めを払い除けて教室を後にした。

バイト先に俺の運転で向かう。
まあ、助手席には智。

『お前さあ… タイミング良すぎ。』

マジで怒鳴る所だったし。

『あゝっ。アレ？遠くで見てたからな…ぶはっ！ちょっと面白かったし、でも、お前キレそうになったから…』

面白い？

そう言う事ですか…

面白かったわけね？

ゴツ！！

『イテッ！何すんだよ。』

助手席で頭を押さえ、悪態をつく智。

『制裁だよ…』

俺の言葉に智は苦笑いした。

『ちよつと、そこ右に曲がつて…！』

急に智が叫ぶ。

バイトの時間遅れるつてのに…

『何処に行くんだよ！』

右に曲がつたけど？

『…！』

えっ？！

『…！』

まさか…

優子さんのマンション？

どう言う事？

『悪い…亜美ちゃんの事が合ったから言えなくてさあ…』

智…顔赤いんだけど…？

『付き合つてんだ…』

『はあ？』

いやいや…マジ驚きですが。

『優子さんと…』

幸せそうな笑顔を俺に向けた。

『そうかあ！！良かったなあ！！』

俺の一言に智は満面の笑みを見せた。

ああ…俺も幸せになりたい。

『と言う事でバイト頑張れよ！』

『えっ！智っ！！』

ボタン…

車から降り外で手を振ってる。

『バイト休む気がよ…。しょうがねえな！』

幸せそうな顔みたら、何も言えないし。

分かったと手を上げて車を走らせた。

『智のせいで…』

遅刻するし、幸せを見せつけられるし…苛々するし、淋しいし…

『はあゝ辛いよなあ…』

店の裏口を開け中に入る。遅刻しても怒られないけど（智の兄貴の店だし。）

少し悪い気がして他の店員に頭を下げ下げ、カウンターへ…

『あ…っ』

カウンターでオーダーしてる人！！常連さんの佐藤さん発見！！

いつ見ても大人だよなあ…。

スーツにネクタイ！！カッコ良いよ。男の俺から見ても…。

『こんばんは…』

俺はそう思いながらたわいも無い会話をする。

あれ？？佐藤さんの連れの人調子悪そう…。

『佐藤さん…。お連れの方大丈夫ですか？』

何か気分が悪そうに見えるんだけど…？

下向いてるし。俺の問い掛けに、ゆっくり彼女は顔を上げた。…！

！！！！

『あ…亜美！！！！』

きつとこの時の俺の顔は…

鳩が豆鉄砲…と言う言葉が当て嵌まったと思う。

髪も伸び、可愛さも増し、最高に《良い女》になっている。

抱きしめたい…。

一瞬眩暈がする。

可愛い過ぎ…。

でも…。

やばくないかあ？

焦点の合わない目で酔っ払ってるのが分かる。

俺にも気付かないし？！

って言うか！！！！

少し…シヨックだよ。

『お酒まだ…？』

亜美の声にさすがにプツンと切れた。

『いい加減しろ…亜美。』

お前何やってんだよ!!!

『りよ…う?』

やっと我に返ったらしい。

『佐藤さん…すみません。亜美借ります!』

俺の言葉に驚いて、佐藤さんはア然とした顔。

『亜美!ちよつと来い…』

俺は亜美を抱き上げ外に連れ出した。

『亜美…お前飲めないだろ?』

下を向いてる亜美を覗き込む。

えっ?!

亜美の顔が怒ってる?

『…じゃない』

『亜美?何?』

何か呟いたよなあ?

何で怒ってるんだ？

ドンッ！！！

『凌には関係無いじゃない！！！！』

亜美はおもいつきり俺を突き飛ばした。

そして…

『私がどうなろうと…。今さら心配しないでよ！！！！』

関係無い…

心配しないで…

久々に逢って、さすがにその言葉はきつい…。

『ゴメン…』

謝るしか無いよ。怒ってる理由も分からない。

逢えた喜びも何処かに飛んで行く。

『話はそれだけよ。じゃあ…』

『嫌だ…』

店に戻ろうとする亜美を力いっぱい抱き寄せた。

離したくない…

行かせたくも無い…

側にいたい…

『ゴメン…佐藤さんには悪いけど、もう限界。』

抱きしめた腕の中で亜美は驚き俺を見上げてる。

『…逢いたかった。』

亜美を強く抱きしめ呟いた。

二度と離したくない。怒ってるなら理由聞いて何度でも謝る。

『そんな事言わないでよ！！彼女が居るじゃない。』

彼女?!俺に??

頭の中をグチャグチャに回して考えた。

やっぱり…偽装お見合いの事を誤解してる?!

ここではつきり言わないと!

『居ないよ…』

俺は抱きしめた腕を少し緩めて亜美の顔を見つめた。

驚いた顔。まだ少し酔ってるのか頬がほんのり赤くて妙に色っぽい

!!!

そんな顔が可愛すぎて…

キスをした。

優しく。そして徐々に深く。

途中で亜美の言葉が入るけど今の俺には周りの事なんてどうでも良い…。

ただ今は亜美を感じたかった。

『亜美…』

そつと唇を離して

『ずっと…好きだった。二度と離れたくない…。』

今1番彼女に伝えたかった事を真剣に言葉にした。

抱きしめてた腕を強くする。

彼女もゆっくり顔を上げて

『私も絶対に離れない…』

俺の背中に回されてた腕が強くなった。

今度は大丈夫だよな…。

回り道して辿り着いた幸せ。もう何も心配する事はな…

あれっ！

って言うか！！！！

『亜美！！！！佐藤さんとはどう言う関係！？』

俺は大事な事を忘れてた。

『やばい！！！！忘れてた……。ゴメン！凌、店に戻るよ！！！！』

本当に忘れてたみたいで、腕から離れ店に戻ろうとしてる。亜美…
答えになってないし。

『だから…どう言う関係？！』

後ろから追い掛け問いただす。

『ああ！砂耶が紹介してくれた人だよ。』

し…紹介！！！！

マジで？！

『おいっ！亜…』

チュッ…

亜美からの不意打ちのキス！！！！

『大丈夫だよ！元々断るつもりだったから／＼。』

真っ赤な顔で店内に戻る彼女の後ろ姿を見送った。

俺は嬉しさのあまり足が動かない。

ヤバイ。か…可愛すぎだよ。

『凌さぁーん！どうしたんっすか？突っ立って。つつつか…顔真っ赤！…！』

ちょうど店に来た大学の後輩が俺に話掛けてくる。

『うるせえーよ！…！早く店入れ！…！』

後輩は不思議そうな顔して店に入って行った。

真っ赤…か？！

『俺…やばっ！今、亜美の顔見れねえーよ……』

俺はその場にしゃがみ込んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2168b/>

貴方の隣

2010年11月6日01時32分発行